

第18回

春日井市交響楽団 定期演奏会

2009年7月5日(日)

開演 15:00 (開場 14:00)

春日井市民会館



ごあいさつ



お祝いのことば

春日井市交響楽団
名誉会長

春日井市長

伊藤 太

七夕飾りが軒先に揺れる季節を迎え、春日井市交響楽団第18回定期演奏会が開催されますことを心よりお慶び申し上げます。

市民のみなさまにクラシック音楽を身近に親しんでいただく場として、国際的な演奏家をお招きし、学生と社会人により結成されたオーケストラが共演する定期演奏会をこうして毎年開催されますことは、ひとえに関係各位のみなさま方のためまぬ努力の賜物であると、深く敬意を表す次第であります。

本市では、本年4月に文化スポーツ部を新設し、文化とスポーツの一層の振興を目指しているところであり、貴団の活動は音楽文化の発展を担う柱として誠に心強い限りであります。

今回は、気鋭の指揮者として国際的に活躍される濱津清仁氏のもと、ソリストに日本を代表するチェロ奏者の林峰男氏を迎えられ、滋味あふれる豊かな音色と管弦楽が織りなすハーモニーが観客のみなさまを魅了できるものと確信しております。

結びに、楽団員のみなさまが日頃の研鑽を存分に発揮され、盛況な演奏会となりますとともに、ご出演のみなさまをはじめ関係各位のますますのご盛栄を祈念いたしまして、お祝いのことばとさせていただきます。



ごあいさつ

春日井市交響楽団
会長

中部大学 学監

三浦 昌夫

春日井市交響楽団の第18回定期演奏会においていただきありがとうございます。本日の定期演奏会に、世界でご活躍のチェリスト林峰男さんをお招きすることができました。林さんは、才能教育で育ったことをとても誇りにされてみえます。2年前、中部大学キャンパス・コンサートにおいていただいたときに、アマチュアの市民オーケストラである春日井市交響楽団のことをお聞きになって、「一緒に演奏してみよう」とおっしゃいました。市民オーケストラにとって、まことに得難い機会です。名曲の協演だけではなく、弦楽器の演奏法についても多くのご教示をえました。心から感謝申し上げます。

また、ウィーンで研鑽を積まれた若き指揮者濱津清仁さんにも、情熱的で親切なご指導をいただきました。

また、これまでにないほど多くのみなさまが賛助会員としてご支援くださいました。

今回の定期演奏会は、すべての意味で、市民オーケストラとしての春日井市交響楽団の成長の成果を、春日井市民のみなさまにお聴かせできるものと自負しております。

最後まで、ごゆっくりお聴きいただければ幸いです。

プログラム Program

ロッシーニ (1792~1868)

Gioachino Antonio Rossini

歌劇「ブルスキーノ氏」序曲

Il Signor Bruschino

ドヴォルザーク (1841~1904)

Antonín Dvořák

チェロ協奏曲 口短調 作品104

Violoncello Konzert h moll Op.104

- 第1楽章 Allegro : 快活に速く
第2楽章 Adagio ma non troppo : ゆったりと (でもあまりはなはだしくなく)
第3楽章 Allegro moderato : 穏やかに速く

《休憩》 Intermission

ブラームス (1833~1897)

Johannes Brahms

交響曲第2番 二長調 作品73

Symphonie Nr.2 D dur Op.73

- 第1楽章 Allegro non troppo : 快速に (でも急ぎ過ぎないように)
第2楽章 Adagio non troppo : ゆったりと (でも過度にならないように)
第3楽章 Allegretto Grazioso (Quasi Andantino) : 優雅にやや速く (ほぼアンダンティーノ)
第4楽章 Allegro Con Spirito : 速くかつ元気よく

チェロ独奏 林 峰男

指 揮 濱津 清仁

演 奏 春日井市交響楽団

プロフィール



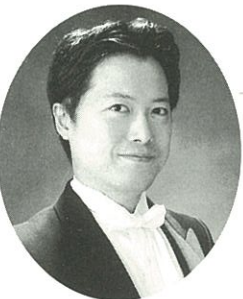
チェロ独奏
林 峰 男

1946年東京生まれ、幼少よりチェロを才能教育で学ぶ。桐朋学園で斎藤秀雄氏に師事。その後ジュネーブ音楽院で学び第1位で卒業。スイス・ローザンヌ室内管弦楽団のソリストとしてデビューを飾った。

1975年、ベオグラード国際チェロ・コンクールに優勝。1976年にはワシントンDCとニューヨークのカーネギーホールでリサイタルを開き、アメリカでのデビューを果たしたが、ニューヨーク・タイムズ紙はその演奏を絶賛した。1977年スペインで開催された『カザルス生誕100年コンサート』に招待され、日本を代表するチェロ奏者の地位をえた。1976年以来、スイス・ロマン管弦楽団、ザグレブ・フィルなど数々のオーケストラと共演する一方、スイスを本拠地としながら、室内楽、リサイタルなど数多くの演奏会を世界各地で開いている。日本へは毎年定期的に帰国し、全国各地で積極的に演奏活動を行っている。オーケストラとの共演も新日本フィル、東京フィル、東京交響楽団、大阪フィル、ロイヤルメトロポリタン管弦楽団など十指に余る。

1985年にはパッハ生誕300年を記念して『無伴奏チェロ組曲全6曲』を一夜で演奏するという画期的な企画で、全国17ヶ所・日本縦断コンサートを行い脚光を浴びる。1995年には東京・カザルスホールで『デビュー20周年4日連続演奏会』を開催。ピアノの故園田高弘氏との共演をはじめ、連日ホールを満席にした。

デビュー30周年の2005年には、没後30年のシオスタコーヴィッチの作品に精力的に取り組み、加藤知子(Vn)伊藤恵(Pf)とのトリオ・リサイタルが、NHKテレビで放映されるなど今後ますますの活躍が期待される。また、栃木県大谷石窟洞内で、月光を受けながら行った二夜連続の演奏会や下呂の地芝居の殿堂「鳳凰座」、京都寂光寺、東京・増上寺(開創600年記念)の本堂でのリサイタルなど、独創的取り組みも行っている。現在、国際スキメソード音楽院教授など、後進の指導にも力を注いでいる。スイス・ローザンヌ在住。



指揮
濱 津 清 仁

2004年ウィーン楽友協会黄金ホールにて、オーストリア・ウィーン放送交響楽団を指揮し、鮮やかな楽壇デビューを飾った新進気鋭の指揮者。幼少よりピアノ・ヴァイオリンを学び東京音楽大学ピアノ科に入学するも、後に指揮科に転科し1997年同大学を卒業。在学中より、オペラ・声楽付き作品への才能を示す。その後、渡欧し、ウィーン国立音楽大学指揮科に入学する。在学中より頭角を現し、主任教授レオポルド・ハーガーの許、管弦楽・オペラなど広範に亘るレパートリーを吸収し、ウィーン国立音楽大学主催公演に、ウィーン・プロ・アルテ管を指揮する。学内だけに留まらず、ルーマニア国立オラデアフィルの定期演奏会、ハンガリー・セゲド管、Orchestra Haydn di Bolzano、Ensemble Zandonai Orchestra da Camera di Trento(イタリア)、Ensemble de l'Orchestra de Cadaques(スペイン)を指揮するなど活発な活動を展開し、特に自ら主宰したウィーンにおける“SAKURA”室内管弦楽団との活動も特筆される。ヨーロッパでの正統的な指揮教育を受けた濱津が紡ぎ出す音楽は、奇を衒わない解釈と清冽な響きに満たされ聴衆からの熱い支持を受けている。国内での活動にも取り組み、札幌交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、セントラル愛知交響楽団、中部フィルハーモニー交響楽団、兵庫芸術文化センター管弦楽団などに登場した。

東京音楽大学指揮科、ウィーン国立音楽大学院指揮科をそれぞれ卒業。これまでに、レオポルド・ハーガー、エルヴィン・アツツェル、湯浅勇治、小澤征爾、秋山和慶、汐澤安彦、広上淳一に師事。

オーケストラ 春日井市交響楽団 Kasugai City Philharmonic Orchestra

市民オーケである春日井市交響楽団は、ベートーヴェンの「第九交響曲」の演奏会を春日井市で開きたいという市民の思いから生まれました。それを受けて、「市民が演奏し・市民が聴く、春日井市民のオーケストラ」として、市内の音楽愛好家を中心に、1990年(平成2年)11月に創立されました。愛称『カポ』(KAPO)は英字名称「KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA」の頭文字をとったもので、イタリア語の「カポ」(capo 頭・先頭に立つ者)の思いもあります。毎年、7月の定期演奏会と12月の「春日井市民第九演奏会」を中心に、数多くのオーケストラ活動を行っています。団員は、会社員・公務員・教員・医師・主婦・学生・自営業者などからなる60名。私たちにとって最大の喜びは、一人でも多くみなさまに演奏会においでいただき、音楽を聴く喜びとともにクラシック音楽が好きになっていただくことです。そのために、「春日井で名曲の名演奏を」と心がけています。また、「春日井の開かれた音楽の窓」となって国の内外の最高の音楽家との共演にも努めています。これからも、さらに、市民のみなさまに親しまれ、愛されるカポとして、市民音楽活動をつづけて参ります。温かいご支援をお願いいたします。

曲目解説

春日井市交響楽団は、今回の定期演奏会に、世界的なチェロ奏者林峰男さんをお招きしてドヴォルザークの「チェロ協奏曲」を春日井市民のみなさまの前で演奏します。私たちにとって最高の栄誉の時であり、最高の喜びです。初演は、アメリカでもなく、ボヘミアでもなく、1896年、作曲家の指揮、イギリスの有名なチェリスト、レオ・スターンのソロ、フィルハーモニー交響楽団の演奏によってロンドンで行なわれました。いま春日井はロンドンです。レオ・スターンは林峰男さんです。では、ドヴォルザークの雄大なチェロ協奏曲をお聴き下さい。

また、ドヴォルザークをこの世に送り出したのはブラームスです。それで、プログラムの最後は、ブラームスの「交響曲第2番」にしました。最初に演奏するロッシーニの軽快なファルスの「序曲」は、指揮者濱津清仁さんのみなさまへ名刺がわりのごあいさつとなるものです。

春日井市交響楽団音楽監督 都築正道 (中部大学教授)

歌劇「ブルスキーノ氏」序曲

ジョアッキーノ・ロッシーニ
(1792-1868)作曲

21才のロッシーニが書いた1幕物の「ファルサ」(笑劇)です。1813年1月にヴェニスで初演されました。「ファルサ」は、台詞の中に音楽が入る短い幕間劇です。ここはロッシーニの最初のオペラ「結婚手形」を初演してくれた劇場で、その恩義のために彼は合計5曲の「ファルサ」を作曲しました。処女作の「結婚手形」(1810)・「幸せな誤解」(1812)・「絹の梯子」(1812)・「なりゆき泥棒」(1812)とこの「ブルスキーノ氏」(1813)です。この劇場は私立の小さな「大衆のためのオペラ劇場」で、数人の専属歌手がいて、合唱はなく、装置は簡素な舞台が一杯だけ、リハーサルも2・3日だけがやっただけでした。それでも新人作曲家にとっては夢の舞台です。この小規模さが、かえってまとまりのいいオペラを書くのにふさわしい条件でもありました。19世紀の音楽界を代表するオペラ作曲家ロッシーニは、この笑いの大砲の号砲によって、幸運なスタートを切ることが出来ました。

若いソフィアとフロルヴィッレは愛しあっています。しかし、ソフィアの後見人ガウデンツィオはソフィアをブルスキーノ氏と結婚させることに決めています。ただ、ガウデンツィオはこのブルスキーノなる人物とは面識がなく、また、ソフィアの恋人のフロルヴィッレとも会ったことはありません。それを良いことに、フロルヴィッレはブルスキーノ氏になりすまして、ガウデンツィオに会いに来ます。そこへ父親のブルスキーノ氏がやってきます。「これは私の息子ではない」といいだし、ここから、例によってドタバタ喜劇が始まります。この序曲も、ロッシーニの才気煥発さがみなぎっていて、時には、第1ヴァイオリンが譜面台を弓の裏側(木の部分)でコンコンコンとたたいて見せます。

チェロ協奏曲短調

アントニン・ドヴォルザーク
(1841-1904)作曲

民俗性 フル・オーケストラの交響曲にチェロのソロが加わった「大協奏交響曲」です。ボヘミアの作曲家ドヴォルザークが、遠くニューヨークの音楽院の院長時代に、ホームシックになりながら書いたのが交響曲「新世界より」と弦楽四重奏曲「アメリカ」とこの「チェロ協奏曲」です。どれも彼の代表作として大きな人気をえているのは、アメリカの音楽とボヘミアの音楽が、民俗性という一点で共通の楽想の中に溶け込んだ奇跡の作品だからです。ドヴォルザークは、異国の民族性に強く魅せられて、自国の民族性をあらためて思い出しました。特徴あるリズムも、五音階も、哀愁をおびた旋律も、管楽器の音色も、どれもアメリカ風で、どれもボヘミア風なのか判然としません。ヨーロッパ音楽の中心から遠く離れた二つの古い伝統的な民族音楽の分ちがたい融合が、ドヴォルザークの音楽の新しさであり、最大の魅力です。

協奏曲 残念なことに、ピアノやヴァイオリンの協奏曲に比べて、「チェロ協奏曲」の名曲は数えるほどしかありません。古くはボッケリーニに始まり、C.P.E.パッハからハイドン、ロマン派のシューマン、タルティーニにドヴォルザークにフランスのサン＝サーンスにイギリスのエルガー、新しくはヴェーンやウォルトンといったところでしょうか。その中で、最も演奏される機会が多いのがこのドヴォルザークの「チェロ協奏曲」です。低音楽器としてチェロの魅力は十二分に際だたせるために、オーケストラに低音のチェンバロとトロンボーンを加えています。そのため、倍音に支えられた深い宗教的で内省的な響きが生じ、この曲を、単なるヴァルティオーゾ的な協奏曲の華やかさに陥ることから救っています。オーケストラは、決して伴奏

を務めるではなく、まるで交響曲を演奏するように堂々とその立場を主張します。当然主役であるチェロもまた、時には海になり山になり、時には花になり蝶になって、その豪快さと優しさ、美しさと軽快さを誇ります。ドヴォルザークの協奏曲におけるチェロとオーケストラの共演こそ、まさに「協奏(お互いを尊重し讃え合う)・共奏(一緒にアンサンブルを楽しむ)・競争(激しく技術をしのぎ合う)・競走(クライマックス目指してテンポの速さを競う)・狂騒(快楽に生きる)・強壮(エネギッシュな)・凶相(失敗したとき)」といった「キョウソウ」の同意語をすべて併せ持つ特異なものがああります。ドヴォルザーク55歳の1896年3月作曲家の指揮、イギリスの名手レオ・スターンのチェロで、ロンドンで初演されました。大成功でした。

郷土料理 ロマン派の天才たちの時代に遅刻したばかりに、チェコ生まれのドヴォルザークは、その他大勢の「国民楽派」に入れられてしまいました。この音楽史上の名称が、良くも悪くも彼の運命を決めました。あるとき、アメリカのお金持ちジャネット・サーバー夫人は、根なし草のアメリカ化の現状を憂えて、「みなさん、いまからでも遅くはありません、新世界アメリカに固有な伝統的音楽を生み出しましょう」とニューヨークに音楽学院を創ることにしました。彼女は、そのニューヨーク・ナショナル音楽院の第2代目の院長に現在活躍中の最高の民族音楽作曲家を世界中から選び、その中から、遠いボヘミアにいるドヴォルザークに決めました。1892年、51才のドヴォルザークは、これまでの収入の20倍にも当たる年一万五千ドルの報酬と1日3時間の授業と4回の学生コンサートの開催と自作演奏会の指揮を6回と4ヶ月の帰国休暇を条件にアメリカにやってきました。でも、作曲法だけを輸入しようとしたこのサーバー夫人の実践的な「アメリカ音楽構想」にはもともと無理がありました。彼に未来のアメリカ音楽発展の夢を託したアメリカ人は、1893年、ニューヨークのフィルハーモニー協会管弦楽団の演奏会で「交響曲第9番」を聴いています。「ここにはアメリカの黒人霊歌や民謡や舞曲があふれているアメリカ楽派の誕生だ」。他国の優れたコックを招いて、自国アメリカのありあまる豊富な素材を使っても、出来た料理は、やはりボヘミア料理です。最初はその意見にあいまいであったドヴォルザークも、ホームシックがつのつてくると、「アメリカで作曲した音楽はすべて粋なボヘミアの音楽だ」といい出しました。双方の誤解の原因は、多くの民族音楽に共通する「5音階」にあります。単旋律のメロディだけ聴けばインディアン音楽であり、ボヘミアやスコットランドの音楽であり、中国や日本の音楽でもあります。しかし、和声がつけばドヴォルザークです。アメリカで書いた《交響曲・新世界より》(1893)や《弦楽四重奏曲・アメリカ》(1893)や《チェロ協奏曲》(1894/95)といった彼の代表作を記念に残して、ヴォルザークはふるさとのプラハへ帰りました。

第1楽章 (快速に)短調・4/4拍子・ソナタ形式[15']

低音楽器のチェロが「テーマ」です。クラリネットの低い柔らかな響きからまず私たちが温かな落ち着いた世界へ導いていきます。スラヴ的に暗いチャイコフスキーの「交響曲第5番」の導入部と良く比較されますが、この柔らかさや暗さや温かさや落ち着いた響きは、ヴァイオリン協奏曲やピアノ協奏曲にない、チェロ協奏曲ならではの特性です。第1主題それ自身が変奏曲になっていて、第1小節の動機を第3小節で変奏しています。

【第1主題】

